

論点整理ペーパー及び農薬専門調査会体制

(平成 28 年 4 月農薬専門調査会決定)

	頁
農薬専門調査会体制（平成 28 年 4 月農薬専門調査会決定）	1

【参考】

（部会で ADI 等が決定し幹事会へ報告する農薬）

トリフルメゾピリム	2
-----------------	---

農薬専門調査会体制(平成28年4月農薬専門調査会決定)

幹事会

農薬専門調査会座長及び座長代理、各部会座長、農薬専門調査会座長が指名した者

審議結果を幹事会に報告

幹事会

西川 秋佳 《座長》	清家 伸康
納屋 聖人 《座長代理》	※永田 清
※赤池 昭紀	中島 美紀
浅野 哲	長野 嘉介
※上路 雅子	林 真
小野 敦	本間 正充
三枝 順三	※松本 清司
代田 真理子	與語 靖洋

評価第一部会

○小澤 正吾
(岩手医科大教授・動物代謝)
○平塚 明 《座長代理》
(東京薬科大教授・動物代謝)
○清家 伸康
(農研機構ユニット長・植物代謝)
○本多 一郎
(前橋工科大教授・植物代謝)
○相磯 成敏
(バイオアッセイ研部長・毒性)
※赤池 昭紀
(和歌山県立医科大学客員教授・毒性)
○浅野 哲 《座長》
(国際医療福祉大教授・毒性)
○佐藤 洋
(岩手大教授・毒性)
○豊田 武士
(国衛研室長・毒性)
○平林 容子
(国衛研部長・毒性)
※藤本 成明
(広島大准教授・毒性)
○桑形 麻樹子
(秦野研室長・生殖)
○堀本 政夫 《座長代理》
(千葉科学大教授・生殖)
○山本 雅子
(麻布大名誉教授・生殖)
○林 真
(安評センター名誉理事長・遺伝毒性)
○森田 健
(国衛研室長・遺伝毒性)
○若栗 忍
(秦野研研究員補・遺伝毒性)

評価第二部会

○杉原 数美
(広島国際大教授・動物代謝)
○中島 美紀
(金沢大教授・動物代謝)
※永田 清
(東北医科薬科大教授・動物代謝)
○腰岡 政二
(日本大教授・植物代謝)
○中山 真義
(農研機構研究領域長・植物代謝)
○小野 敦 《座長代理》
(岡山大教授・毒性)
○三枝 順三 《座長》
(日本実験動物学会事務局長・毒性)
○高木 篤也
(国衛研室長・毒性)
※松本 清司
(信州大特任教授・毒性)
○美谷島 克宏
(東京農業大准教授・毒性)
○義澤 克彦
(武庫川女子大教授・毒性)
○中島 裕司
(大阪市立大教授・生殖)
○納屋 聖人 《座長代理》
(産総研客員研究員・生殖)
○八田 稔久
(金沢医科大教授・生殖)
○福井 義浩
(名古屋学芸大教授・生殖)
○根岸 友恵
(日本薬科大非常勤講師・遺伝毒性)
○本間 正充
(国衛研部長・遺伝毒性)

評価第三部会

○加藤 美紀
(名城大准教授・動物代謝)
○篠原 厚子
(清泉女子大教授・動物代謝)
※玉井 郁巳
(金沢大教授・動物代謝)
○與語 靖洋 《座長代理》
(農研機構研究領域長・植物代謝)
○吉田 充
(日本獣医生命科学大教授・植物代謝)
○川口 博明
(鹿児島大特任准教授・毒性)
○久野 壽也
(豊川市民病院病理診断科部長・毒性)
○高橋 祐次
(国衛研室長・毒性)
○長野 嘉介 《座長代理》
(長野毒性病理コンサルティング代表・毒性)
○西川 秋佳 《座長》
(国衛研研究センター長・毒性)
※山手 文至
(大阪府立大教授・毒性)
○代田 真理子
(麻布大教授・生殖)
○塚原 伸治
(埼玉大准教授・生殖)
○中塚 敏夫
(名産研中部TLOアドバイザー・生殖)
○石井 雄二
(国衛研主任研究官・遺伝毒性)
○太田 敏博
(東京薬科大教授・遺伝毒性)
○増村 健一
(国衛研室長・遺伝毒性)

※:専門参考人

トリフルメゾピリム

諮問理由	化学構造	作用機序	用途	評価資料
・新規登録	メソイオン系	ニコチン作動性アセチルコリン受容体に結合し、神経伝達を遮断する	殺虫剤	<ul style="list-style-type: none"> ・試験成績の概要及び考察 ・試験報告書

【試験成績の概要】

1. ^{14}C で標識したトリフルメゾピリムのラットを用いた動物体内運命試験の結果、単回経口投与後 48 時間の吸収率は、低用量群では少なくとも雄で 77.4%、雌で 84.2%、高用量群では少なくとも雄で 54.4%、雌で 63.4%と算出された。臓器及び組織中残留放射能は胃腸管、肝臓、腎臓、膀胱、下垂体等で高かったが、経時的に減少し、特定の臓器及び組織における放射能の蓄積性は認められなかった。投与放射能は投与後 48 時間でほとんど排泄され、低用量では尿中に、高用量では糞中に多く排泄された。高用量で糞中排泄率が高くなるのは、吸収率の低下が一因と考えられた。尿、糞及び血漿中放射能の大部分は未変化のトリフルメゾピリムであり、代謝物として尿中では A、C、J、L、P-OH 等が、糞中では A、F、J 等が、血漿中では A、C、D 等が検出された。
2. ^{14}C で標識したトリフルメゾピリムの畜産動物を用いた動物体内運命試験の結果、主要成分は未変化のトリフルメゾピリムであり、10%TRR を超える代謝物として、ヤギでは J 及び Jg が、ニワトリでは C 及び J が検出された。
3. ^{14}C で標識したトリフルメゾピリムの水稻を用いた植物体内運命試験の結果、残留放射能の主要成分は未変化のトリフルメゾピリムであり、10%TRR を超える代謝物として、茎葉処理の玄米で H が、未成熟茎葉及び稲わらで L がそれぞれ認められた。
4. 各種毒性試験結果から、トリフルメゾピリム投与による影響は、主に体重（増加抑制）、血液（貧血）及び肝臓（重量増加、T.Chol 増加等）に認められた。催奇形性、免疫毒性及び生体において問題となる遺伝毒性は認められなかった。雌のラットにおいて、血中プロラクチン濃度の低下が認められた。
5. ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験において雌で子宮（頸部を含む）の扁平上皮癌、マウスを用いた 18 か月間発がん性試験において雄で肝細胞腺腫の発生頻度がそれぞれ増加したが、腫瘍の発生機序は遺伝毒性メカニズムによるものとは考え難く、評価に当たり閾値を設定することは可能であると考えられた。
6. ラットを用いた 2 世代繁殖試験において繁殖能に対する影響は認められなかったが、より高用量で実施された 1 世代繁殖試験において着床数及び産児数の減少並びに雌雄 F₁ 動物の生殖機能発達の遅延傾向が認められた。